

な

ご

み

つ

う

し

ん

発行日：平成28年3月22日（第15号）

発行：島田療育センターはちおうじ

「障害は個性」という言葉を、最近耳にします。「個性」って何でしょう？相手の立場に立ってイメージすると、案外見えてくるかもしれません。そんなお話を紹介します。

所長 小沢 浩

### ～障害を持っている人の 気持ちを考えよう～

みんな、天井を見てみよう。そして顔を左右に動かしてみよう。これだけしか見えない世界だったらどうだろう。味気ない、つまらない、悲しい世界だけが広がる。実は、ベッドで寝たきりの人はこの世界しか知らない。だから、ベッドを起こしたり、うつ伏せにしたり、車椅子で散歩したりすることが大切なのである。

次に目をつぶってみよう。そしてそのまま立って体を一回転させて、もう一度座ってみよう。立って回って座るという動作が、目をつぶるだけでどんなに難しいことか。視覚障害といわれている人たちは、その世界で生きているのである。



視覚障害といわれている人同士の結婚披露宴での話である。日頃付き合いのある仲間たちが実行委員形式でパーティーを開いた。出席者の中には目の見えている人もいたので、子ども時代の写真やデートのときの写真をビデオ上映していた。

その間場内は照明が消えて真っ暗。視覚障害のない健常者といわれている出席者は食べかけた料理の手を止め、スクリーンに見入っていた。

ビデオが終わりみんなで拍手してパッと明かりがついた。エビのチリソースでも食べようかなと思って、テーブルの上を見ると大更に盛り付けてあった料理がほとんどなくなっている。

見えない人には、明るいか暗いかなんて関係ない。だから、ビデオ上映の最中も音声を聞きながら、黙々と食べ続けていたのだ。

「あんたら、見える人間を差別するのはいい加減にしいや〜」

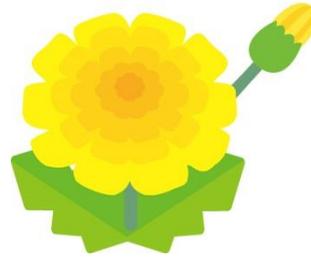
と、思わず言ってしまったけど、

「そうや、差別というのは、どっちが多いか、少ないか、比率の問題なんや」

「数の多い、比率の高い人たちが、比率の少ない人への想像力を欠いて制度を作るから差別が起きるんやな……」

とそのとき初めて気づいた。

(ラッキーウーマン、竹中ナミ、2003、飛鳥新社 東京)



もう一つの話。これも視覚障害と言われている人の話である。いつも明かりの無い世界で住んでいるので、夜に電気はいらな。そのため、電気をつけていないで過ごしていたが、そうすると訪れた人がいないと試してみんな帰ってしまった。そのため仕方ないので電気をつけることにした。

「夜、電気をつけないと生活できない人たちって不便ですよ。」

と語っていた。

視覚障害と言われる人たちは光がなくても生活できる。点字が読める。でも我々にはそれができない。障害って思っていることは、我々と違うことがあるっていうだけで決めてしまっているのではないのだろうか。見方を変えれば、我々がもっていない才能をいっぱい持っている人たちなのである。

(奇跡がくれた宝物 小沢浩著、クリエイツかもがわ より)

